第四十四回　史学会大会報告

【西洋史】

中世ヨーロッパにおける結婚制度についての考察

細川　まい（本学大学院　博士前期課程）

本稿は、中世ヨーロッパにおける結婚制度の形成過程と、社会的変動が結婚に及ぼした影響を整理することを目的とする。

まず、一九八一年に刊行されたG. デュビーの“*Le chevalier, la femme et le pretre*”（日本語版：『中世の結婚：騎士・女性・司祭』篠田勝英訳（新評論、一九八四年初版））の古典的研究を手がかりに、一二－一三世紀フランスを対象に結婚慣行が制度化していく過程を概観する。デュビーによれば、中世社会には、禁欲主義を背景とする「聖職者モラル」と、家系維持を重視する「貴族モラル」の二つの結婚モラルが存在し、一一－一二世紀初めには、両モラルに対立が生じていた。しかし、一二世紀半ば以降、家族構造や相続形態の変化を背景に、両モラルに歩み寄りが生じる。特に、次男以下にも結婚と相続の機会が与えられたことは、教会の婚姻規制の受容を促した。一方、デュビーが提示した「聖職者モデル／貴族モデル」という二分法は、地域差・家族戦略など多様な要因を説明しきれていないという指摘もされている。

次に、石坂尚武『イタリアの黒死病関係資料』（二〇一七年、刀水社）をもとに、一四－一五世紀のフィレンツェに注目し、黒死病後の社会変動が結婚に与えた影響を検討する。

黒死病の大流行は、フィレンツェの人口を半減させ、人口回復のための結婚・出産がすすんだ。流行直後には、男子の初婚年齢の平均が下がり、若者の結婚が増えるも、一五世紀にはその傾向が弱まる。この背景に、石坂は「嫁資」の高騰を挙げる。その要因として、女性の装飾品需要の高まりによる「嫁資」の高額化を挙げ、若い男性が結婚を躊躇する状況が生まれたとしている。さらに、この状況は、「女性」（奢侈に走る女性）対「男性」（女性の奢侈で結婚を躊躇せざるを得ない男性）との対立構造を生じさせたとしている。

中世の結婚構造は、地域背景や時期変化、身分階層といった多様な要素が影響している。今後は、それぞれの地域が置かれていた経済・家族構造などとの関連を含め検討を行うことを課題としたい。

【考古学】

福島県猪苗代湖周辺における縄文時代前期前半の土器付着炭化物の放射性炭素年代測定

野村　萌々花（本学大学院　博士前期課程）

東北地方の縄文時代前期の大木1・2a式土器は、一九三七年に山内清男が発表した「縄紋土器型式の細別と大別」において層位的に区分されたが、土器の文様の分類は十分でなく現在まで混乱が生じている。また、当該時期の土器付着炭化物の年代測定例はまだまだ少なく、さらにその実施例も沿岸部の遺跡に集中し、海洋リザーバー効果の影響を受けているという問題がある。そのため、本研究では福島県猪苗代湖周辺を研究フィールドとして、この時期の年代測定を体系的に実施することを目的に、福島県笹山原遺跡群№16遺跡と桜川遺跡出土土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。さらに、土器内面付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比を測定して、土器を用いて何を煮炊きしたのか推測し、海洋リザーバー効果の有無を検討した。

今回、放射性炭素年代測定を実施した遺跡の概要を示す。福島県会津若松市に所在する笹山原遺跡群№16遺跡は、後期旧石器時代前半期および縄文時代前期、古代を中心とした複合遺跡であり、郡山女子大学短期大学部考古学研究室によって二〇〇一年から継続した調査が行われている。縄文時代前期の住居跡が検出され、大木1式を中心とした土器がまとまって出土した。また、桜川遺跡は福島県猪苗代町に位置し、縄文時代前期前半を中心とする遺跡である。学習院女子大学による二〇二三年から現在までの調査で、大木2a式土器を中心とした遺物包含層と多数の炭化物が付着した土器が確認された。

炭素・窒素安定同位体比の結果から、煮炊きの内容物は陸上動植物に関係するものと推定された。よって、海洋リザーバー効果の影響はないと考えられ、今回得られた年代値は信頼性が高い。縄文時代早期末から前期前半期の土器付着炭化物の放射性炭素年代測定の結果、IntCal20による暦年較正年代で7,400～5,900 cal BPの数値が得られた。

本研究で得られた縄文時代前期の年代測定値は、従来示されていた年代観と概ね一致した。今回、特に大木1・2a式の土器について多数の測定結果が得られ、その年代的位置づけがより明確になったことは大きな成果である。